

氏 名 (本籍) <sup>おお こう ちりょう ぎ</sup> 大河内 了義 (愛知県)

学 位 の 種 類 博士 (文学)

学 位 記 番 号 乙第31号

学位授与の日付 平成7年5月16日

学位授与の要件 学位規程第3条第2項

学 位 論 文 題 目 WIE MAN WIRD, WAS MAN IST

—Gedanken zu Nietzsche aus östlicher Sicht—

論文審査委員 (主査) 教 授 箕 浦 恵 了

(副査) 教 授 訓 覇 曄 雄

(副査) 教 授 寺 川 俊 昭

### 学位請求論文審査要旨

19世紀のドイツ精神史に登場した哲学的著作家フリードリヒ・ニーチェは、その後のヨーロッパ精神史において、哲学・神学・文学・芸術などの諸領域に広くかつ重大な影響を及ぼしてきた。今世紀におけるニーチェ研究は、ヤスパース、ハイデガー、レーヴィット、ピヒトなどのドイツの哲学者たちによる優れた業績のみならず、イタリア人学者ジョルジョ・コッリとマッツイーノ・モンティナーリによる『批判版ニーチェ全集』の刊行、フランスにおけるフーコー、デリダ、ラクー・ラバルト、ドゥルーズなどの諸家によるニーチェ研究の成果によって新たな局面が開かれたのは周知の通りである。それらの研究はいずれもヨーロッパ的思考の枠組みに沿って行われたものである。しかるに、ニーチェの思索の究極の目的が、ヨーロッパ2000年の思想の伝統を「トータルにかつラディカルに」批判することに存するとすれば、そしてそのことがとりもおさず「ニヒリズムの到来」を意味するとすれば、ニヒリズムとその超克は西欧世界のみならず、西欧化された日本の痛切な問題でもあると言わなければならない。ニーチェに関する影響作用史的問題意識は、今日、このように拡大され、日本もその圏外ではない。近年、米国の学者グラハム・パークス教授が『ニーチェとアジアの思想』(Nietzsche and Asian Thought, 1991)を刊行したのも、そのような思想的状況を踏まえてのこと

であろう。アジアにおける影響作用史的意識を明確にすることは、同時に、アジアにおける思想的伝統との対論を呼び起こさざるをえない。かかる試みは単なる比較思想的研究に終わるものではなく、ニーチェを見る新しいパースペクティヴを生み出す作業となる。

本論文の表題は「人間はいかにして本来の自己となるか——東洋的視点からみたニーチェ論考」であるが、この主題の表現は、ニーチェの最後の著作『この人を見よ』の副題として用いられたものである。これは恐らくは、古典文献学者ニーチェが、古代ギリシャの抒情詩人ピンダロスのピューティア祝勝歌から取り出した詩句の一つであろうと推測されるが、この詩句は「汝自身を知れ」という、かのデルポイの銘に連なり、人間の自覚的自己生成の課題を端的に言い表すものであることは言うまでもない。ニーチェはキリスト教的表現の主題に対して古典ギリシャ的表現の副題を配して、自己生成を語ろうとしたと考えられる。ニーチェが自己の内奥に分け入り、自己生成の細部まで剔りだして明らかにしようと試みたように、人間の本来的自己生成を主題とする本論文は「東洋的視点」、とりわけ「仏教的視点」に分け入り、筆者の自己生成の課題としてニーチェを論究している。影響作用史的問題意識のもとに、ニーチェを見る新しいパースペクティヴはこうして開かれて来る。このような意味で、本論文はすぐれて主体的、宗教的なニーチェ研究である。本論文は明晰なドイツ語による労作であるが、それは筆者が影響作用史的問題意識において、ヨーロッパの思索にたいする応答を試みようとしたからである。本論文は以下の五章から成っている。

第1章 ニーチェはなぜ日本において問題になるのか。

第2章 問いの始まり、ニーチェ青年期の著作について。

第3章 言葉と思惟——「われ考う」ではなく「それ考う」。

第4章 ニーチェの自然概念——自然の人間化一人間の自然化。

第5章 運命愛と仏教における業、東洋的視点からみた深い宗教の人間ニーチェ。

### 〔論文内容の要約〕

第1章、ニーチェはなぜ日本において問題になるのか。この問いに答えようとする場合、この問いのもっている位相がけっして単純ではないことに気づくが、問題の核心はニヒリズムにおいて見出される。ここに言うニヒリズ

ムとは、ニーチェによって自覚されたニヒリズム、すなわち、近代ヨーロッパにおける根源的かつ全面的な危機の自覚としてのニヒリズムと、日本におけるニヒリズムとの二つを考えなければならない。

そこで、上記の問いに対してまず第一に考えられる事柄は、ニーチェにおいて最も鮮明にあらわれたニヒリズムと、それに対して近代化しヨーロッパ化した日本人の問題、すなわち思想的とは言えないまでも感情的なレベルでの呼応が、日本におけるニーチェ書の盛んな出版という特異な現象として確認されるということである。デカダンス現象がヨーロッパ化した国々に、日本に不可避的に生起し、広くかつ深く浸透して、ニヒリスティックな感情がニーチェを読む素地になっていることがまず指摘されうる。

ニーチェが日本においてよく読まれる第二の理由は、その直観的思考の文体にあるのではないかということ、換言すれば、そのパトス的な、肉体化された思惟が日本人の読者を得る大きな要因になっていることは否めないであろう。主観・客観という思考の枠組みを突破して、一挙に全体を把握しようとするニーチェの直観的思考と、言語構造からして本来、主観・客観という思考構造をもたない日本語による直観的思考との呼応が考えられる。このことは、「言葉と思惟」の問題として、本論文の第3章において改めて詳論されている。その問題は、非ヨーロッパの思惟において、別な思惟の可能性を見出そうとしたニーチェの思索に連なる問題として考察すべき事柄でもあるからである。

第三に考えなければならないのは仏教の問題である。ニーチェと仏教との間には思想的類縁性があると言えるが、その類縁性は単純ではなく、複雑な様相の下にある。ニーチェはショーペンハウアーが仏教に深い関心を寄せた後をうけて、そのニヒリズム論において仏教を問題にしている。しかしかれは当時のヨーロッパのインド学の水準に限定されていて、最後まで、本当に仏教とくに大乘仏教を理解しなかった。ニーチェは「無意味なものが永遠に」という最も極端なニヒリズムを「仏教のヨーロッパの形態」と呼び、ヨーロッパに到来すべきニヒリズム的カタストロフを「第二の仏教」とも言っている。ニーチェはヨーロッパにおけるニヒリズムの到来を仏教の再来と見なしたのであり、かれのそのような仏教観によれば、仏教は生と意志との完全な否定ということにおいて、かれのいわゆるデカダンスの極まる所であった。しかし実はそういうニヒリズム的な仏教観においてではなく、「ニ

ヒリズムのニヒリズムによる克服」としての「運命愛」において、ニーチェの思惟は「空」,「他力自然」,「業」を説く大乘仏教に近づいたのである。しかし、仏教の他の問題性が今日の日本には見出される。日本人の多くは、知識階級の多くですら、すでに宗教に無関心である。大乘仏教の偉大な伝統は過去のものになりつつあり、永遠の眠りにつきつつあるのが現状であり、ただ僅かな人のみが目覚めており、明白な意識をもってこの伝統を担っている。このような状況を積極性へと転化させる思惟が求められなければならない。仏教における人間存在の究極、仏に成ること *das Buddha-Werden* と、ニーチェにおけるニヒリズムの克服としての絶対の肯定というヨーロッパの課題が日本において出会うということがニーチェ研究の課題として見出される。「ニーチェはなぜ日本において問題になるのか」という問いにたいする上記の課題こそ、筆者のニーチェ研究の根本的問題を形成するものである。このような課題を意識するとき、ニーチェはいわば生きた思想家としていまなお問いを投げかけている。本論文の第4章、第5章において展開された論考はニーチェと仏教との思想的類縁性を上述したような問題意識をもって考究したものである。

第2章、問いの始まり、ニーチェ青年期の著作について。ニーチェの自伝的著作『この人を見よ』の結びの言葉は、「ひととはわたしを理解したか? ……ディオニュソス対十字架にかけられた者」という一句であった。この句は対立する世界観を象徴し、その対決こそニーチェがその生涯を一貫して担った根本課題であった。この根本課題を明らかにするため、筆者はニーチェの処女作『悲劇の誕生』以前、つまり1865年以前にニーチェが書いた文章に目を向ける。ニーチェはその年、神学を捨て古典文献学に向かっている。それはかれがショーペンハウアーやワグナーを知る以前であった。その時期のニーチェに目を向けることは、いわば無垢のニーチェを直接に見ることによって、ニーチェの根本問題を見出そうとすることに他ならない。驚くべきことに、ニーチェにおいては、すでに少年時代にあって、かれの後の哲学の衝動と思想とが台頭している。「すでに2000年ものあいだ人類は神という幻影にまどわされてきたのではないか」、「キリスト教の全体はたんなる仮定の上に成り立っているのではないか。神の存在、不死、聖書の権威、等々は依然として疑問に残る」、というラディカルな問いかけと、その問いを問うこ

との懼れに震える若いニーチェの姿がそこにはある。「疑惑の大海にコンパスもなく船出しても、新しい大陸を発見できるなど極めて少数の人間にすぎない」、ともかれは言う。しかし、その少数の人間の一人、例外者の一人たらしとする決意が明確になっている。後年ニーチェは「わたしは運命である」というが、かれはただ一人「疑惑の大海」に船出したのであった。さらに、ニーチェの生涯にわたって思索と批判の対象になった「道德」の問題、人間存在を「生成の途上にあるもの」とする人間観、歴史を直線ではなく「輪」Ringと把握するところには「同一物の永遠回帰」や「運命愛」を説く晩年のニーチェの萌芽がはやくもこのときすでに見てとれる。

「人はいかにして本来の自己になるか」ということは、その生涯を通じて示される。「わたしは問いであり、試みそのものである」、とニーチェはいうが、かれの生涯を貫く問いを明確にすることの意味は大きい。少年ニーチェの問いはひとりニーチェの問いであるにとどまらず、それは「全ヨーロッパを二分する」ほどの重大な問いの始まりというに価するからである。

第3章、言葉と思惟……「われ考う」ではなく「それ考う」。『善悪の彼岸』においてニーチェは、言葉についての考察をデカルト批判から始めて言っている。「われ考う」をめぐるのは論理家の迷信がある。ある考えが訪れるのは、それ（考え）が欲するときにてあって、われが欲するときではない。だから「われ」という主語が「考える」という述語の条件であるなどというのは事実を歪曲するものである。むしろ「ソレが考える」というべきであろう。このソレが、まさにかの有名な「われ」に他ならないなどというのなら、おだやかな言い方をしても、ただ単なる仮定、ただ単なる主張にすぎないのであり、ましてや、かの「直接的確実性」などではけっしてない。所詮この「ソレが考える」もすでに言い過ぎなのである。ソレ自体すでに一つの思考過程の分析の結果であり、この過程それ自体には属していない。この場合、人々は文法的習慣に従って推論しているにすぎないので、考えることは一つの活動である。すべて活動には活動の主体がある。故に……というわけだ。このように考えて、ニーチェは主語—述語という文法的枠組みが思惟の本来的始源性を阻んでいるのではないかと言うのである。「主語—述語」という言語構造とは別の言語で思惟する人々が「世界を違ったように見、違った道を歩む」ということは大いにあり得ることだ、という。

ニーチェのこの指摘、すなわち「文法への信仰」、文法的習慣に伴う虚構を検証するため、筆者は日本語の言語学的・比較文化論的考察を試みる。インドゲルマン語と日本語における人称代名詞の考察、時枝文法を参照しつつ日本語の主語についての考察に基づき、日本語はいわゆる客観的抽象的な表現を好まず、具体的主体（主観）的な状況の中で発話され、また理解される、つまり、「ことば以前」の状況が言語表現を生む、という日本語の特質を筆者は指摘している。これと関連して、日本語は能動・受動の態がインドゲルマン系諸語のように明確ではなく、逆に、インドゲルマン系諸語には存在しない自発態 *Spontaneität*（例えば、山が見える、音が聞こえる、など）といういわば「主客未分の状態」を端的に表現する態に注意している。日本語のこのような特質はどのような思惟を展開し、また世界をどのように違ったふうに見、違った道を歩むのであろうか。その問題の具体的検討は自然概念の問題として次の章において検討される。

第4章、ニーチェの自然概念——自然の人間化——人間の自然化。ニーチェの1881年頃の遺稿に注目すべき断章がある。「わたしの課題……自然を脱人間化すること、それから人間を自然化すること。その前に人間はまず自然の純粹概念を獲得しておかなければならない」。ここにいう「人間の自然化」とはどのようなことか。人間存在とは個人であるという現代ヨーロッパ人の意識に強固に存続し続ける思想をニーチェは「妄想」であると斥け、個人だと誤って考えられているものは、実は大いなる生命体系 *Lebenssystem* の一部分、その蕾であるにすぎないと言う。そして共に個人だと考えられている自己と他己とを超えて、その宇宙的な生命体系、すなわち自然と一体になること、これがニーチェの言う「人間の自然化」であり、自然の純粹概念とは生命体系のことであると解される。しかし現実には人間の意識にあってはその反対であり、むしろ個人（と妄想されたもの）が「自然」を自分の尺度によって「人間化」してしまっている。したがってこの人間化された自然を脱人間化して、本来の自然へ帰ること、これが人間の自然化である。ニーチェはそういう根本的な転換を行うことが「わたしの課題」だと言ったのである。ニーチェの自然概念は近代自然科学の意味での自然（人間により対象的に観察され、分析され、利用される自然）ではなく、古代ギリシャ人が *φύσις* と呼んだもの、スピノザによって考えられゲーテにおいて問題となった「生

ける自然」,「能産的自然」に近いと筆者は見定めている。そうして、ニーチェのこのような自然概念は東洋における「理」としての「自然(じねん)」に近いと言う。筆者はさらに老子、親鸞、西田幾多郎、西谷啓治らの「自然(しぜん)、(じねん)」概念を詳細に検討し、西欧における自然概念と東洋・日本における自然概念は、相交わる2個の円のよう、意味の異なる部分と共通する部分とが有って、ニーチェの自然概念はこの両者を結び合わせる中間項の役割を果たしうるものではないか、と考えている。

第5章、運命愛と仏教における業、東洋的視点からみた深い宗教的人間ニーチェ。ニーチェが、かれのいう本来の自己に成る歩みを自覚的にあゆみ始めたのは、1881年夏シルス・マリアにおける不可思議な体験からであると考えられる。その体験は「同一物の永遠回帰」と定式化されるが、体験の内容そのものは『悦ばしい知識』第四部のアフォリズムに言われているように、現在あるような自分を「変様させ、あるいは粉碎してしまうかも知れない」ような「最大の重圧」と感覚されたものであった。それは一切が「意味もなく、目標もなく、無への終曲もなく、不可避免的に回帰する」というニヒリズムの窮極の体験であり、それをそのまま肯うことができるかという窮極の問いかけであった。このニヒリズムの克服は、ニヒリズムを窮極まで生き抜くこと、完全なるニヒリストになる以外にない。それは『ツァラトゥーストラ』の表現を借りれば、蛇に喉の奥深くを咬まれた牧人が、蛇を「噛み切り、蛇の頭を遠くかなたへ吐き出した……かくて、力強く立ち上がった」ということであり、このような転換、あるいは転換への覚悟をニーチェは「運命愛」*amor fati*と定式化した。「運命」*fatum*という語は、本論文第2章で考究したように、ニーチェの少年時代から重大な意味をもつ語であり、それは「意志」との関わりにおいて、また「自由と必然」との関わりにおいて思索し続けられたものであった。

*amor fati*の解釈は一義的に決定しえない問題性を含んでいる。『ツァラトゥーストラ』においてニーチェは「おお、わが意志よ、なんじ一切の困窮の転換よ、なんじわが必然よ!」と書いているが、この点からすれば、*amor*はハイデガーの解するように *Wille* ということになる。しかし、何故ニーチェはわざわざラテン語の *amor* という表現を用いたのかという問題は依然として残る。

ニーチェにおける *amor fati* の理解のために、仏教における「業」の思想を考究することにより新たな視点を得ることができるのではないかと筆者は考える。「業」の思想の端的な表現は、「我昔より造るところの諸々の悪業は皆無始以来の貪瞋痴による。身口意より生ずるところなり。一切我今みな懺悔す」(漢訳 華嚴経 懺悔文)という表白にうかがわれ、それは「業の自覚」的表現に他ならない。自らの生存を業に繫縛された無始以来の流転存在であると自覚することは、ニーチェのいう「同一物の永遠回帰」の思想に深く相通じるものがあり、その絶対のニヒリズムとしての永遠回帰を自らのこととして我が身に引き受けるところに「運命の愛」が生まれることは、業の自覚こそが、業からの窮極の解放とする仏教(殊に『歎異抄』第13条に見られるごとき)に呼応する思想ではないか。そして運命愛の極まりにあらわれる「自然」、それはニーチェの別の言葉でいえば、「子供であること」(Kindsein)、「汝なすべし」(Du sollst)、「我欲す」(Ich will)、「我あり」(Ich bin)という「精神の三つの変様」の最高の段階にあたると考えられる。しかし、三段階を継起的に、発展史的に考えているところに、ニーチェはいまだ「煩惱を断ぜずして涅槃を得」という「即」の論理には到達していないと考えねばならず、ニーチェの本来たる“*Wie man wird, was man ist*”に違うことではないか。ただ作家、詩人としてのニーチェは、『陽は沈む』や『ヴェニス』など二三の詩において、たまゆらではあるにせよ、この境地を味わい得たのではないかと解される。

### 〔論文審査の要旨〕

西欧において1930年代に始まったニーチェ研究の優れた諸成果を丹念に摂取し検討した上で、それら西欧の研究者とは異なった独自の視点から、ニーチェの思想が含む問題を考究した本論文は従来にない新たな学的寄与として評価されるべきものと考えることができる。本論文第1章において筆者は、日本におけるニーチェの影響作用史的問題意識を明確にして、ニーチェ研究の視点を確立しようと試みた。そのことから生ずる課題は、大乘仏教へのニーチェの思想的類縁性を明らかにしてニーチェ解釈の鍵を見いだすことであった。その詳細な論考は本論文の第4章と第5章とにおいて展開されている。その論考に先立ち、ニーチェの思想をその始まりから晩年まで導いた「問い」はどのような問いであったかを、1865年以前の青年期ニーチェの文



章に見出し、その問いがいかに重大な意味を持ったものであるかを明らかにしている。この考究は、哲学・思想の研究において思索家の思惟を貫く問いがその思想の解釈・理解にとっていかに大切かという解釈学的意味をもった研究として評価される。第3章においてはニーチェの言語観にたいする日本語の意味を考え、新しい思惟のありかを求め、特異な比較言語論を形成している。第4章においてはニーチェの自然概念がいわゆる西欧的自然概念としては考えられない特異なものであることを明らかにして、それが東洋・日本の優れた思想家たちの自然概念に接近するものであることを、比較思想的・比較文化論的に解明している。そして最終章第5章においては、ニーチェの「運命愛」の思想を仏教とくに大乘仏教における「業」思想を参照することによって理解し、ニーチェの思惟のめざした方向を明らかにしている。「ニヒリズムの克服」としての「一切の転換」がどのような内実をもつ思想的遂行であるのかを、あくまでもニーチェの内在的解釈として解明していることは高く評価される。

各章いずれも独自のあたらしい研究成果であり、論証も説得力のあるものである。ただ、第3章の言語論から第4章の自然概念の論考への展開において、筆者はその連関を示唆するにとどめていることは、やや心残りの感なしとしない。ニーチェの思想の内実にかかわる連関であると考えられるからである。また筆者は東洋・日本における自然観、とりわけ仏教における自然概念の究明を親鸞を典拠として遂行したが、親鸞における「自然」(じねん)を自然概念として解することには問題性があると考えられる。仏教における自然概念の論究において取り上げるべき第一の思想は道元のそれであるのではないか。

そのような論議の余地が若干のこされているとはいえ、本論文は極めて高度な独創的ニーチェ研究の成果であり、学会への価値高い寄与であるとともに、西欧の思想的問いかけにたいする応答としても評価すべき業績であると考えられる。本論文が明晰なドイツ語で書かれていることは、すでに筆者のかかる応答の姿勢の表明であり、国際社会の日本における学問のあり方にたいする指標でもあると言えよう。

以上のように審査した結果、本論文は博士の学位に十分に値するものと判定することができる。

〔最終試験及び語学試験の結果〕

この論文およびこれに関連する事項についての口頭試問・外国語学力確認の結果、筆者は学位規程の定めるところに必要な学力を有するものと確認された。